

第5回「暮らしにかかわるリスク情報の読み解き方」

10月30日

小島正美・毎日新聞生活家庭部

1 洗濯機のカビはアトピーの原因か（記事参照）

- ①リスクの客観的な大きさを伝えようとしていない
 - ②警告する見出しの大きさは、客観的なものではなく、他社との関係でも決まる。最初に書いた社は大きく扱う。抜かれたら、否定しようとする。
 - ③「危ない」と書くことが記者の使命だと感じて、書いている。その記者はいまもよい記事を書いたと思っている
 - ④科学的な根拠がなくても、大きな見出しの記事になる。珍しいか、初めてか、がニュースの価値を決めている。
 - ⑤学者の都合のよいところだけを引用して、記事を危ない仕立てにしている
- ◆特ダネ意識がバイアスを生んだ。読者がどう行動するかにまで愛情をもつ

2 中国産は本当に危ないか（記事参照）

- ①サンプルに偏り。特定の評論家に頼って取材。危ないという情報が多くなる。
 - ②全体の統計では中国の違反率は0・09%低い。米国の方が高い。
 - ③ポジティブリストへの誤解。記者の勉強不足。
- ◆記者は制度の意味、統計の基本をよく勉強すべきだ。

3 BSE（牛海綿状脳症）はどれくらい危険か

- ①全頭検査はどこまで感染牛を発見できるか
- ②米国の言い分は正しいか
- ③西欧でも全頭検査をやっていないのはなぜか
- ④10億分の1のリスクをどう考えるか

★これまでの事例で分かったことは何か

- ①専門家のリスクとメディアのリスクは異なる。
 - ②メディアはニュース性を重視。客観性を報道していない
 - ③消費者はバイアス情報を受け取って行動している
- ◎専門家のリスク＝①ハザード（事の重大性）×②その現象が起きる確率×③ベネフィット
- ◎消費者のリスク＝①ハザード（事の重大性）×②その現象が起きる確率×③ベネフィット×④メディア情報の特質、あいまいさ、行政への不信、自発的なリスクか、情報の公開性、企業への不信 未知の謎（分からないから不安）、決定への参加の有無、報道の頻度

4 GM（遺伝子組み換え）はどこまで危ないか

- ①なぜ世界の22カ国で栽培するのか
- ②巨大企業の支配は本当か
- ③遺伝子を組み換えるとはどういうことか
- ④遺伝子は食べても大丈夫か
- ⑤インターフェロンはGM、大丈夫か
- ⑥神の摂理を冒瀆するのはGMだけか
- ⑦長期の動物実験は可能か

5 子どもが襲われる極悪犯罪は増えているか

- ①統計的には極悪犯罪は減少。なぜ人々は不安になるのか
- ②安全ビジネスだけが増殖する。
- ③パトロール費用などは図書充実に回すべきか
- ④子どもたちに犯人から逃げる術を教えるべきか

6 無添加は安全か

- ①保存料はなくなって、PH調整剤が増える
- ②安全はタダではない。冷凍流通費用は増えて、コストはかかる
- ③安全かどうかは「量」次第。薬を100万分の1に割ったらどうなるか

7 鳥インフルエンザはどこまで危ないか

- ①5億人が死ぬ、は本当か
- ②最近の見方は「ヒトには感染しにくいウイルスだ」

8 テレビ、広告などメディア情報のバイアス

- ①CMは欲望を喚起するもの。基本的にモノを買わせるため。
- ②いまの生活に不満心理をもたらし、もっと買わなければと思わせる
- ③夏の海開き。なぜ女性の水着か。オトコがつくるから。カメラマンはみな男。
- ④メインキャスターはなぜか男ばかり。読む側は女性で、コメントは男性。なぜ？
- ⑤なぜ化粧品CMなどで巨乳や水着、美女ばかりか。ジェンダーへの偏見。
- ⑥お天気キャスターはなぜ美女ばかりか
- ⑦写真週刊誌、女性週刊誌も、女性への蔑視が多い。なぜか
- ⑧チンパンジーとイヌの物語。どの編集もワンカットのつなぎ合わせ。ストーリーに合わせて、つなぎ合わせていく。ストーリーがウソだということもある。
- ⑨映像は、視聴者に見せたいものを見せるだけ。全体を見せているのではない。